

# 感性を刺激するインドネシア研修の成果と 大学教育の一考察

辰 島 裕 美

## 目次

はじめに

### 1 海外研修の概要とインドネシア

1-1 研修地の模索

1-2 海外研修の目的

1-3 インドネシアの概要

1-4 ジャカルタの特別な事情

1-5 訪問先と日程

### 2 学生の学び

2-1 経営幹部の話から

2-2 企業を見学して

2-3 同世代と交流して

### 3 異文化理解と教養教育

おわりに

## キーワード

「異文化理解」、「教養教育」、「学士力」、「社会人基礎力」、「キャリア教育」

## はじめに

2014年度、本学の海外研修では初の試みとして、新興国の一つであるインドネシアで日本企業の訪問見学と技能訓練学校で同世代との交流を行った。これまでの海外研修の訪問先は、英語が話されている欧米圏やオセアニアが主な対象地域であったが、今回は語学力の向上より、異文化理解を優先させる目的があった。研修の目的と理由、および期待する成果を、企業の経営幹部に示したところ、強い共感と賛同があり、そのための講話を約束してくれた。その結果、成果としては学生の反応から大きな手ごたえを感じた。日報やレポートから得たものであるが、期待以上に鋭い感性で異文化を感じ強く受け止めて書かれたみずみずしい言葉を提示して、本稿では、その概要と結果を表し、異文化理解と教養教育との関連を議論する。

## 1 海外研修の概要とインドネシア

### 1-1 研修地の模索

筆者の過去の経験で、ソウルでの学生交流や現地での会話において、韓国語が話せない日本人学生と、日本語が堪能でない韓国人が、英語でコミュニケーションをとったことから、学生が間接的に英語の必要性に気付いたことがあった。このことから、英語能力の向上に寄与するきっかけとして、研修先でネイティブスピーカーと直接話をするだけで唯一の方法ではないことがわかった。また、語学の向上は、根気強く長期にわたって勉強を続けることが必要であるため、どのようにモチベーションを維持するかという点も、長期的な教育では重要である。学生に異文化を体験することでインパクトを与え、言語力の必要性に気付かせたいと考えた。

インドネシアを訪問国に選んだ理由は複数ある。まず、石川県内の企業が海外進出している出先に東南アジアがあげられた。本学の学生の多くは、卒業後に石川や富山の企業に就職する。県内の企業は伝統的に繊維関係が多く、また製造業でも、東南アジアに出先を持つ企業が少なくない。多くの学生が卒業後に身を置く場所は主に地域の企業である。入社した会社がすでに東南アジアに進出している場合は、決して東南アジアに無関心ではない。

インドネシアは、石川県内の高等学校の修学旅行先としてあまり注目されていない。知名度が低く予備知識が少ないと、学生が先入観を持たずに現地を訪れ、現状を肌で感じることができる。インドネシアの首都ジャカルタは交通渋滞が有名だが、道路にひしめく二輪や四輪の自動車は、その95%が日本車である。経済の成長につれ、二輪が四輪に、小型車が大型車へと買い替えが進むことを見込めば、インドネシアはこれからの日本の関係国として重要であるといえる。成長しきった都会より、新興国から学ぶことを期待した。衛生環境や治安に不安はないとはいえないが、親日国である点は研修先として好条件の一つであった。日本人はインドネシア語にほとんど無縁であることから、日本人スタッフが常駐する企業の訪問と、日本語を勉強している学校の学生との交流を計画した。

表1 目的と課題

<p>&lt;目的&gt;</p> <p>アジアでの英語コミュニケーションを実感し実践力の必要性を知る 海外で働く日本のビジネスマンの講演を聞き、異文化を肌で感じ、視野を広げる 日本の企業と海外の出先を訪問・交流し、地方におけるグローバルを考える</p> <p>&lt;課題&gt;</p> <p>日本とアジア、北陸とアジアの関係で、若者に期待されていることは何か？ アジアで働く日本人の目的、なぜここで働いているの？ インドネシア人の職業観や人生観と言語の関連性は？</p>
--

## 1-2 海外研修の目的

今回は異文化理解を促進することを研修目的の要とした。若年層の就職状況が厳しい今日、多くの若者は社会へ出ることについて多少の不安を抱えている。そのような若者が、異国で文化を体験して自信や勇気を持つことができれば、就職活動にも有効に働くと考えたためである。また、異文化を体験することは、これまで気が付かなかった新しい自分や別の一面を発見することにつながり、キャリア教育における自己分析の一助にもなる。

昨年度までの海外研修の目的を一部踏襲し、日本語以外のコミュニケーション言語を意識させることも、目的の一つである。

## 1-3 インドネシアの概要

インドネシアは、約1万3千500という膨大な数の島々からなる群島国家である。国土は東西5千100キロにわたる。これは、アメリカ本土の東西の距離で、東京-シンガポール間の距離とほぼ等しい。民族や言語は300以上といわれ、人口は中国、インド、アメリカについて世界第4位の2億5千万人である(2014年)。アメリカ中央情報局(CIA)のサイトによると、日本の国民年齢の中央値が46歳に対して新興国のインドネシアは29歳と、若い人であふれている国である。日本と同様で、インドネシアも中央の都市ジャカルタに人口が密集しているが、広い範囲に多くの島々、それぞれの島にはそれぞれの民族や言語があり、歴史や特徴もあるため、統一したことのほうが不思議といわれる。この点は、単一民族国家とは大きな違いである。

インドネシアでは、宗教の自由が認められている。イスラム国家と誤解されがちなほど、イスラム教徒が多く、国民の9割に近い。そのため、ジャカルタやブカシで企業や学校を訪問した際には、宗教に関連した部屋や設備などの説明を受けた。宗教はインドネシアや国民を理解するにも避けられない事柄である。

## 1-4 ジャカルタの特別な事情

ジャカルタでは、移動の手段として効率の理由よりも安全性と確実性の理由で、全日車をチャーターして活動した。公共の交通機関には、鉄道とバスがある。鉄道は不便で検討の余地もない。バスは車体の整備状況に危険を感じるほど古くて粗末である。幹線道路は、時刻の見積もりができないくらい渋滞が激しい。ジャカルタから20キロメートルの距離のブカシまで、深夜なら車で20分だが、日中なら2時間、時間帯によっては3時間の覚悟が必要とも聞いた。単に車が多いだけではなく、インフラとして道路の整備が不十分なためである。車両は左側通行であるが、道路の右側のビルに用事があっても、数キロ先まで行かないとUターンできないといったことは珍しくない。目的地へ行くためのルートは、ほぼ1つしかない。道路の車線といったものは無いに等しく、わずかな隙間でも横から車やバイクが入り込んでくる。そのため、タクシーやレンタカーという選択肢も消え、日本人は車をチャーターすることになる。ジャカルタでは、日本人が日本企業を訪問する時も、

時刻を正確に守れるはずがない。企業の訪問は午前1社、午後も1~2社が限界である。チャーターした車の窓からは、建物や路上で商売をしている人（物乞いも含めて）などから市民生活を垣間見ることができたが、貧富の差はすぐ感じられる。高層ビルが林立する大通りでも、子供が小銭を稼ぐ姿があり、脇道は車がすれ違えないほど道幅が狭く、わずか数メートル先で道路の舗装は途絶える。汚れた小川があり、貧しい生活が見て取れる廃墟のような家屋があり、猫やヤギなどの動物がいる。そのような路地で日本人が歩けば、貴重品を奪われるなどの被害が考えられるので、滞在中はホテルから一步も外へ出ることはできない。

渋滞が激しい幹線道路しかないという状況は、日本に住んでいる私達では、実際に行って自分の目で視ることなしには信じがたいほどの現実である。

### 1-5 訪問先と日程

今回の研修では、ジャカルタと近郊のブカシで合わせて7か所を訪問し、見学や交流を行うことができた。訪問先は、個人的な関係を中心に訪問を依頼した。ジャカルタについてインターネットで調査を進めるうちに日本商工会議所の出先機関であるジャカルタオフィスの存在を知り、コンタクトをとった。事務局長からは、とても懇切丁寧に情報を提供してもらった。テレビ番組で知った現地の技能訓練学校へは、面識はなかったがメールで訪問と交流を申込み、実現に至った。さらに、訪問させてもらえそうな企業を紹介されて訪問が実現したところもある。訪問先は表2の通りである。このような経緯で、表3の日程を計画した。

表2 訪問・見学・交流先

<p>&lt;公的機関&gt; ジャカルタジャパンクラブ</p>
<p>&lt;企業訪問&gt; カジマシナリーインドネシア / 梶製作所本社・石川県かほく市（8月） セコムインドネシア / セコム本社・原宿ショールーム インドネシアみずほ銀行 / みずほバリモアファイナンス じゃかるた新聞</p>
<p>&lt;技能訓練学校&gt; MINORI 女子研修施設 / MINORI 語学研修施設</p>



図1  
ジャカルタ市内で車内から撮影  
ひしめく車の中に入り込むオートバイ



図2  
技能訓練学校 MINORI の日本語研修施設  
学生がビンゴゲームをアレンジした活動でインドネシアの生徒が書いた文字を確認している様子

表3 日程と活動内容

日	内 容	滞在地
2014,9, 1 (月)	小松空港集合-羽田 セコムショールーム見学 -深夜, 羽田出発-	東京 (機内泊)
2 (火)	-早朝ジャカルタ着- ジャカルタジャパングラブ訪問 じゃかるた新聞訪問	ジャカルタ
3 (水)	セコムインドネシア訪問 インドネシアみずほ銀行間見学 みずほバリモアファイナンス	ジャカルタ
4 (木)	MINORI 女子生徒の施設訪問, 交流 (1)	ジャカルタ
5 (金)	MINORI 日本語研修施設訪問, 交流 (2) カジマシナリーインドネシア訪問見学	ジャカルタ
6 (土)	移動 ジャカルタ-バリ	バリ
7 (日)	ゼミ・ディスカッションと研修のまとめ	バリ
8 (月)	予備日 自主行動 -深夜, バリ出発-	バリ (機内泊)
9 (火)	バリ発-羽田経由-小松着 解散	

## 2 学生の学び

### 2-1 経営幹部の話から

この研修で学生に話をしてくれた現地法人の経営幹部は過去の海外経験が豊富であった。そんな経営者から学生が学んだことには、企業の特徴を色濃く反映していることもあった。たとえば、チャレンジ精神や向上心、ブランド力といったキーワードである。

学生が「海外への赴任が決定した時に不安ではなかったのか？自分に引き当てると、現地に住むということは、仕事だけでなく、文化にも対応する必要があるので、抵抗を感じるが...。」といった質問に、彼らは「不安というよりやってみようという挑戦の気持ちが大きかった」と答えた。このことから、学生は大きな驚きと共に、「そのチャレンジ精神がビジネスの成功につながるのではないだろうか。仕事の話をしている時のキラキラした目から、これからもどんどんと上に行くという向上心が伝わってきた。自分で限界を決めないからこそ、海外で仕事をすることや、立ち上げたばかりの現地企業をさらに良くするというような意欲が次々とわいてくるのだ。」とレポートに表した。チャレンジ精神や向上心は、海外のみならず、国内でも企業の文化として社訓などに掲げている企業も多い。学生は「向上心とチャレンジ精神は見習いたい。常に上を目指す人になりたいし、普段の生活やこれからの就職活動でも大切なことだといえる。」という抱負も表した。

大手企業にはその企業名にブランドの力がある。短大生にとって、ブランドとはファッションなどの服飾や食品関係で、どちらかという消費をする側のイメージや知識がほとんどであろう。今回の訪問先は、製造業と金融、及びサービスといった、学生にはなじみの薄い業種であった。しかし、企業は業務の説明の中にブランド力をとてもわかりやすく説明した。ブランドの話に、学生は「会社名というブランドを海外でも維持するためには、世界のどこでも同じサービスを提供する必要がある。しかし、地域の文化に合わせて会社を運営することと、同じサービスを提供することには、時に矛盾も起こり得る。その調整は簡単なことではないだろう。」と、異文化への日本人の対応に気づいていることがわかる。

「人口が多いインドネシアでは、口コミの宣伝力も大きい。いい噂なら好都合だが、悪い噂ならダメージも大きい。日本人なら当然知っているブランドも、インドネシアではまずブランドを知ってもらうことから始まり、そのための工夫や努力などを想像した。」という記述から、業務の苦勞にも理解を示した。

学生から、海外で働くために必要なものは何かという問いに、すべての経営者からやる気だという回答があった。また、今、勉強すべき点として言語に関する話も必ず語られた。インドネシアは、先述の通り広い面積と人口の多い群島国家で、大別しても約30民族が存在するため、それらを統一するインドネシア語が公用語である。統一後は多くの人々が使えるように、文法も比較的易しいものとなっている。そのため、インドネシアに来てから1か月の猛勉強で、日常生活が送れるようになる、という経営者もいた。また、東南アジアでも英語は不可欠で、何はともあれとにかく英語を勉強すべきだという話や、インドネ

シアでは経営者は英語の必要性を知っているので、自分の子供にはお金をかけて教育しており、本気で勉強している優秀な人は徐々に増え始めているということに、学生は、「必要なこととはわかりながらも、これまで行動してこなかった自分に焦りを覚えた。必要になった時に始めるのでは遅いし、やれる環境にあるのだから、やろうと思った。」と決意している。

## 2-2 企業を見学して

金融業のオフィスと製造業の工場を見学させてもらった。インドネシアでは宗教が日々の生活に入り込んでいるため、施設の見学では、日本との違いを強く感じた。イスラム教徒をムスリムというが、ムスリムには毎日5回の礼拝が義務づけられており、これが1日のリズムになっている。実際にチャーターした車の運転手にも、礼拝の時間帯を避けて送迎を依頼しなくてはならなかった。このように、勤務時間の中に、礼拝は当然のこのように入り込んでいる。

見学した施設には必ず礼拝やその準備に必要な場所や設備などがあつた。説明を受けた学生は、場所を準備することよりも、従業員や現地を理解することの必要性を学んだ。学生は「顧客のために現地を理解することはもちろん必要だが、それだけではなく従業員がムスリムであるという理解が必要である。日本での常識はインドネシアではもちろん通用しないからこそ、日本の制度や方式を押し付けるのではなく宗教と絡んだ文化を取り入れて企業を運営する必要がある、それはとても難しいことである。それを乗り越えて現地で働くには、考え方が柔軟でないといけない。インドネシア人の従業員の雰囲気を楽しそうに見えたのは、日本人の経営者がうまく従業員に対応できているからだろう。」と記述した。

その上手な対応について、学生は次の2点を具体例にあげている。「工場では、作業中に隣の人と良くおしゃべりをするため、人員の配置を対面や横並びではなく、前後に配置して仕切り板を付けるなどの工夫をしていたが、雑談を禁止させるよりも面白い対応だと感じた。効率主義で勤勉な日本人の職場では、考えられない対応である。」「なかなか電話に出ようとしない従業員に対し、社長自らが愉快的な音階で『テレポーン』と笑いを誘うことは、急がないインドネシア人の特徴や従業員の性格を理解しての温かみのある注意の方法である。職場の雰囲気も壊れないし、注意された側も嫌な思いをせずに改善の必要を感じている。こういう対応は、会社全体の意欲にもつながるのだろう。」これらは、経営者の人格によるところも大いにあるだろうが、学生は現地駐在員に必要な要素として、柔軟な姿勢で異文化を理解することと経営者の寛容性を学んだ。また、このようなことは、海外や国内に関係なく、人間関係や雰囲気作りにも大切な配慮である。

## 2-3 同世代と交流して

ジャカルタ近郊のブカシにある技能訓練学校で2日間の交流を行った。この施設は、インドネシアの貧しい農村地域の生徒を対象に、合宿生活をしながら日本語と基礎技能を習

得させ、希望者を日本の企業等に研修生として送り出す会社組織である。代表は日本での留学経験があり、その時に知り合った日本人女性が副代表で、妻である。この日本人女性のドキュメンタリー番組がテレビで放映された。活動内容を学生のレポートをそのまま掲載する。

学生のレポートから

・活動1日目

私と同世代のMINORIの女子生徒達がどの程度日本語が話せるのか全く知らず、自己紹介では上手に話してくれてとても驚いた。日本語の授業を見学したが、ゲーム形式でとても楽しそうだった。勉強を始めて2週間ほどでもひらがなやカタカナをすらすら読んでいた。それから互いに料理を教えあった。インドネシアの郷土料理であるガドガドとフルーツポンチのようなものを作った。フルーツポンチには、パイナップルやドラゴンフルーツなどのインドネシアならではのフルーツもたくさん入っていてとてもカラフルで可愛くできあがった。ガドガドという料理は名前も作り方も初めて見た。作るのには手間がかかり大変だったが、協力して作るのには楽しい活動だった。インドネシアの料理を教えた後は私たちが日本の料理を教えた。いなり寿司とちらしずし、白玉団子を一緒に作った。簡単な日本語の単語や身振り手振りだけで説明するのに四苦八苦したが、必死に理解しようとする姿や作っているときのキラキラした目がとても印象に残っている。喜んでくれたことが何より思い出深い。

とても明るい生徒ばかりだったが、「お母さんの歌」を歌いながら全員が泣き出してしまい、感情表現がそのままであることに、こちらのほうが躊躇した。私たちは今、当たり前のように家族と一緒に住んでいるが、MINORIの生徒達は家族から離れて生活しながら勉強をしている。寂しさや、家族を恋しく思うのはあたりまえである。私は彼女達の涙を見てとても胸が苦しくなった。いつも近くに大切な人がいる状況にある自分達はもっと感謝すべきで、幸せだと感じてもっと家族を大切にすべきだと痛切に感じた。日本では気にも留めないことが、インドネシアでは当たり前ではないことに、私達がどれだけ恵まれているかを実感した。彼女達は私と同世代でありながらこれほど我慢しながらも日本に行くために必死に勉強していた。日本に行きたいと言っている彼女たちの姿は私にはとても輝いて見え、女性としてとても美しいと思った。些細なことで悩んでいる自分が恥ずかしく思え、体つきがやや小柄で、年下にも見える彼女達が大人に見えた。私の持ち物やアクセサリなどに興味を持っている姿はふつうの女の子で、日本のことを興味津々に質問している表情はとても愛らしかった。女性の強さや私の知らなかった美しさを知ることができた。1日の交流だったが、日本には絶対に感じるできないものを感じ、吸収できた。



・活動 2 日目

私達が部屋に入った瞬間、とにかく元気な挨拶の日本語が飛び込んできた。日本語が上手だということよりも、生徒の積極性に圧倒された。例えば日本人の私たちは英語を習っても恥ずかしがってなかなか積極的に話そうとはしない。しかし MINORI の生徒は間違いを恐れずに日本語でどんどん話しかけてきた。日本語を学びたいという意欲が強く伝わってきた。個性的な自己紹介を聞いているうちに、この積極性があるからこそ上達するのだと確信した。先生から、私達が先生役となって日本語の勉強になる活動を頼まれ、責任に気が重かったが、前夜に考えてアレンジしたビンゴゲームではとても盛り上がった。日本に行くことをとても楽しみにして、日本のことを語っているときの笑顔が強く印象に残っている。なにげない私達の言葉までメモしている熱心な姿に、日本に来た時にぜひ石川を案内して再会を果たしたいと思った。

### 3 異文化理解と教養教育

異文化とは、必ずしも異国や他民族の文化ということだけではない。学生がこれまで自身の身を置く場というと家庭と学校が主であり、他人としてかかわる人間関係の大半が学校での友人という同世代である。核家族化が進んだ現在では、社会に出て初めてかかわる世代や背景、価値観の違う人々との文化的な差異は一種の異文化といえる。ジェネレーションギャップをはじめ、多様な価値観が共存する社会を知り、そこで自分という労働資本をどのように用いて人生を歩むかを考えることがキャリアデザインのスタートである。そのため、多様な価値観を知ることに通じる異文化理解は、キャリア教育の要素だといえる。

文部科学省は中教審答申の中で、「多文化・異文化に関する知識の理解」を学士課程共通の学習成果に関する参考指針として、学士力の筆頭に掲げている。また、経済産業省が提唱する「社会人基礎力」には、3つの大項目としての力に12の能力要素を盛り込んでいる。3つの力のうち、第3の力は「チームで働く力」であり、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力がある。インドネシア研修で学生が感じ取って受け入れたことには、チームで働く力の発信力や柔軟性、状況把握力などが含まれている。同世代との交流では直接的に、そして現地の経営幹部の講和からは、どのようにして異文化を理解して乗り越え、現地の人を使っているのかという点で間接的に学んだ。研修の成果は学生達の高い感受性によるものといえよう。レポートから、これらの力に関して学生が強く意識し、多数の理解があったことがわかった。

以上により、感性を刺激する異文化体験としての海外研修は、次の2つに寄与すると考える。第1点目は、キャリア教育の原点である、豊かな人生を送る市民への成長であり、2点目は、職業人として専攻を問わず共通する知識や理解への影響である。また、何人かの経営幹部が、女性は特に気づくことに優れていて、気づきというものはとても重要なことだと口にしていた。感受性も気づきも、教えて高めるものではないが、異文化を経験し、

またその体験をシェアすることで高める機会を増やすことができる。

## おわりに

訪問先には、事前の相談の段階から、研修の目的や期待する成果の話し合いなどに多くの時間とエネルギーを費やし負担をかけた。そして現地では学生のために限られた時間に充実した講話を頂いた。自分たちがしてもらって助かったことをしているだけだと謙虚な言葉を返されたが、研修計画の順調な実現には、ジャカルタジャパンクラブの事務局長から多くの協力を得られたことが大きかった。インドネシアに住む日本人が、学生に働きかけてくれたことは、深く大きい。気づきとモチベーションの本当の成果が表れるのは、学生の人生でいつになるのかわからないが、それが教養教育の真の目的である。

このあと、学生が入社した会社が海外進出する可能性もある。職場には、海外駐在員として出発したり、交代で戻ったり、あるいは、海外から現地人が研修にやってくることも考えられる。グローバリゼーションが進む現在では、自身のみならず、配偶者や家族が駐在員となる可能性もあるので、東南アジアがさらに身近になると推測できる。

## 参考文献

- [1] 山崎裕人、2014、「インドネシアの安全・安心と警備業」セキュリティ・タイム 8月号：pp17-22
- [2] 村井吉敬、2013、現代インドネシアを知るための60章
- [3] アメリカ中央情報局（2014.11.15 確認）  
<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/fields/2177.htm>